

鳥峯は晩年、「自分は、本当は人類学をやりたいかった。」と何度か述懐したと言う。42才の時にアイヌ人の調査を実際に行い、その思いを強く持ったことだろう。67才で生涯を終えたが、もし、もう少し長生きして人類学に打込む事が出来たなら、或いはもう少し早く人類学に専念していたら、人類学的見地から、即ち各論的では無く、総合的見地から、その「創造的預言者」ぶりを発

揮して、もしかすると今のとは全く異なる医学・歯学を提示したかもしれない、などと夢想している。

歴史の世界では「もし」などは許されないという。それならばその「もし」の内容は、次の世代の者に残された課題として生きるだろうか。

(平成26年12月六史学会合同例会)

日本で最初に雇用された女性看病人について

日下 修一

はじめに

従来、1868年（慶応4年）閏4月17日に、横浜軍陣病院に女性の看護人を置いたのを以て、日本初の看護婦とされたが、慶応4年4月24日、栃木県下都賀郡壬生町にある壬生城内であったとされた。それ以降にも、前線病院で女性看病人が存在していた記録はあり、本報告は戊辰戦争の推移の状況から、壬生城内の女性看病人が日本初の看護婦に該当することを論証する。

文献研究資料

弘田親厚著『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』（原本複写）、以下翻刻、弘田親厚著『慶応四戊辰 東征道の記 壺の巻』、同『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』、『京都大政御議定記并関東戦闘日記一ヨリ十七迄』、片岡健吉旧蔵『東征記壺』、『勝沼安塚戦記』、『戊辰従軍戦史名籍』、中央町松本義家文書『慶応四年戊辰年諸御用留帳 通町割元名主 松本庄兵衛』、大山柏『戊辰役戦史（上下）補訂版』、下野新聞平成19年4月1日1頁。

結果

1) 宇都宮城（現栃木県宇都宮市）攻防戦前の戊辰戦争の状況

1867年（慶応3年）慶応3年10月15日大政奉還がなされた。1868年（慶応4年）1月3日から

の鳥羽伏見の戦いで、女性看病人を雇ったという記述はない。また、京都近郊の旧幕府軍や西日本では実質的な抗戦はなく、看病人を雇用する必要がなかった。

1868年（慶応4年）2月7日、旧幕府歩兵2,000名が江戸を脱出し下野方面へ逃走。同3月6日、板垣退助支隊（約1,000名）は柏尾において、近藤勇の甲陽鎮撫隊121名を破った。官軍の負傷者は3名。同3月9日、東山道軍の先遣隊200余名が梁田で脱走兵の旧幕府軍900余名を破った。官軍の戦死者は3名、負傷者は6名で、旧幕府軍戦死者113名。

1868年（慶応4年）3月中旬～下旬、現栃木県南部で農民らによる、打ち壊しが始まり、宇都宮藩領に波及した。同4月5日、鹿沼に押し寄せた一揆勢を宇都宮藩兵が鎮圧。同4月11日江戸城無血開城。大鳥圭介らは旧幕府軍歩兵隊を率いて、下総国府台方面へと脱出。同4月12日に大鳥軍は日光へ向かう。同4月16日小山第一次の戦闘で大鳥軍が新政府軍を破る。同4月17日武井村の戦闘、小山第二次の戦闘、小山第三次の戦闘で大鳥軍は新政府軍を破り、連勝。新政府軍第一次救援隊（土佐・因州など）派遣。同4月18日新政府軍第二次救援隊（長州・薩摩など）江戸を出発。

2) 宇都宮城攻防戦の状況～安塚の戦い

1868年(慶応4年)4月19日大鳥軍宇都宮城攻略。大鳥軍主力は鹿沼泊。同4月20日第一次救援隊壬生に到着。大鳥軍宇都宮に入る。同4月21日夜旧幕府軍600名は宇都宮城から7キロ南の幕田村に陣地を築き、新政府軍500名はその南の安塚に陣を構築した。同4月22日安塚の戦い。新政府軍穿刺16名、負傷43名、旧幕府軍60余名、負傷78名。新政府軍の負傷兵が壬生城に運ばれ、手当を受けていたが、大鳥軍の別働隊に急襲され、土佐藩の小荷駄兵糧方の軍夫役夫などが壬生城を捨てて逃げた。

同4月23日新政府軍宇都宮城奪回。同4月24日旧幕府軍今市(現栃木県日光市)に到着。同4月25日大鳥圭介日光に入る。同4月27日板垣退助壬生に到着。4月28日土佐藩隊壬生を発し、鹿沼に宿泊。4月29日大鳥ら日光退去。瀬川十文字(現栃木県日光市)の戦いで大鳥軍が土佐藩に敗れ、会津へ逃走。

3) 土佐藩病院について

1868年(慶応4年)2月14日に土佐藩は病院組織として医師10名、歩卒(衛生兵)30名を出していた。壬生城に入った土佐藩の兵員は230名程度、医師は5名、歩卒0名であった。治療は当初壬生城内で行われたが、安塚の戦いでは仮病院が安塚の本陣に作られ、その後は壬生城近隣の宿泊施設で治療が行われた。

4) 壬生城内の女性看病人

弘田親厚著『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』の記載四月廿四日「銃創看病人として此地の婦人九人雇入養生局に差置ける」とあり、1868年(慶応4年)4月24日に銃創による傷病兵の看護

のために女性を9人雇用したことが分かる。

5) 下野の百姓一揆

下野の百姓一揆は1868年(慶応4年)3月29日の安塚村の打ち壊しに始まる世直し一揆であり、近隣の石橋宿、雀宮宿(現宇都宮市)、楡木宿、鹿沼へと広がっていった。

考察

安塚の戦いは戊辰戦争の中で、最初の大きな戦いであり、傷病兵も多く、病院の医師や歩卒も不足し、女性看病人を求めた。また、「雇用」した背景には、同年3月頃から下野一帯に生じた農民一揆があり、無報酬で住民を用いることは危険であったためと考えられる。金銭を支払って「雇用」できるのは、一定以下の身分の者の可能性が高く、町人、農民の妻子の可能性が高い。

安塚の戦いまでは、大きな戦闘も少ないため、一定の場所に「病院」を設置する機会がなく、壬生の病院が宇都宮城の攻防戦、それに続く、日光、今市の戦いが会津の戦いまでの重要な拠点として機能したことにより、最初の女性看病人が雇用されたと考えられる。

結論

1868年(慶応4年)4月24日以前に、女性看病人を雇用する機会ほとんどなく、壬生城内で雇用された9人が日本最初の女性看病人、すなわち日本最初の看護婦である。日本で初めて雇用された女性看病人は壬生近辺の農民や町民の子女である可能性が高い。この女性看病人は未訓練であり、その後の看護婦の誕生には寄与していない。

(平成26年12月六史学会合同例会)

宇田川榕菴の写生図と植物標本

加藤 僖重

今春3月、大阪道修町にある公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋より『杏雨書屋所蔵宇

田川榕菴植物学資料の研究』(全768ページ)が刊行された。